

外科通論

佐藤進講義  
門人筆記

主



佐藤進講義  
門人筆記

# 外科通論

明治十三年一月  
廿九日版權免許

佐藤尚中藏版



外科通論卷之二十一

佐藤進講義

門人 筆記

丁 骨腫

オステオ  
オーム

骨腫トハ其形狀他ノ贅腫ノ如ク一部ヲ限局シ  
テ隆起スル異常ノ骨塊ヲ形成スル者ナリ而メ  
獨立ノ發育機ヲ具ヘ且ツオステオピートン<sub>骨贅</sub>  
<sup>ト譯</sup>ト異ナリ毫モ慢性炎機ニ關係ナクシテ生  
スル者ヲ總稱スルナリ骨腫ハ他ノ贅腫中ニ併  
發スルアリ殊ニ骨中ニ生スル贅腫ニ併發スル



多シ故ニ骨腫ノ名稱ハ通常骨組織ヨリ形成  
 スル贅腫ヲ稱命スルナリ其他卵巢或ハハイモ  
 ル洞中ニ生スル異形ナル病性齒牙加之齒牙實  
 質ヨリ發生スル贅腫モ亦骨腫ニ屬スル者ニメ  
 真ノ象牙質骨腫  
ウ  
ル  
シ  
ヨ  
ー  
氏  
ノ  
ト  
 齒牙腫  
メ  
フ  
ン  
ト  
 ノナリ  
 ト名クヘキモ

骨腫ヲ組織學ニ  
 就テ論スルハ  
 一ハ通常骨髓ヲ  
 具フル海綿狀骨

第七十八圖

齒牙ニ生  
 セシ齒牙  
 腫其大サ  
 真物ニ同  
 シ





質ヨリ成リ 第七十九圖

一ハ管骨ノ

大腿骨ノ下

皮様質ノ如

有莖性海綿

ク重層ヨリ

狀質骨腫

形成セラ

ル骨質ヨリ

成ルモノナ

リ故ニ骨腫

ヲ區別シテ海綿狀質骨腫及皮様質骨腫トナス

其他腱筋鞘筋ノ病性化骨ヲメ骨腫ノ第三種ト





做ス者アリ然レ氏此ノ如キモノヲシテ之ヲ贅  
腫ト做スニ至リテハ疑團ヲ免カレ難シ

イ軟骨ヲ以テ被覆セラル、海綿狀質骨腫エキ  
スオ

ストーセス、カ  
ルチラギ子ア

該腫ハ悉ク管骨ノ骨端ニ生ス即チ骨端軟骨ヨ

リ發生スル者ナリ故ニ「ワルシヨ」氏ハ之ヲ化エシ

骨性軟骨腫ト名ケリ該腫ノ圓凸面ニハ凡ソ二コンドロセス、イシヒカンス

乃至三「ミリ」ノ厚サヲ具フル硝子樣軟

骨ヲ見ルヘシ而シテ此薄層ハ一ハ實體一ハ骨

膜ニ向ツテ化骨シ然後速ニ中心ニ向ツテ化骨



スルモノナリ此ノ如ク新生セル骨腫ハ始ヨリ  
骨端ノ海綿質ト密ニ連着スルモノニシテ即チ  
動移スヘカラサル硬腫ヲ形成ス總テ骨腫ハ若  
年ノモノニ生シ易シ殊ニ脛骨補腿骨上膊骨ニ  
生スルヲ多シ

口皮樣質骨腫

該腫ハ管骨ノ皮樣質ノ如クハ

「エル」管ヲ具ヘ且ツ重層ヲ成ス所ノ堅牢ノ骨  
質ヨリ成ルモノナリ而シテ體中之ヲ生シ易キ  
骨ヲ顔骨頭骨髌骨大趾等ノ諸骨トナス其外形  
圓口キモノアリ凸凹不平ナルモノアリ或ハ平



滑ナルモノア

第八十圖

リ

頭蓋骨

第三種ニ屬ス

ニ生セ

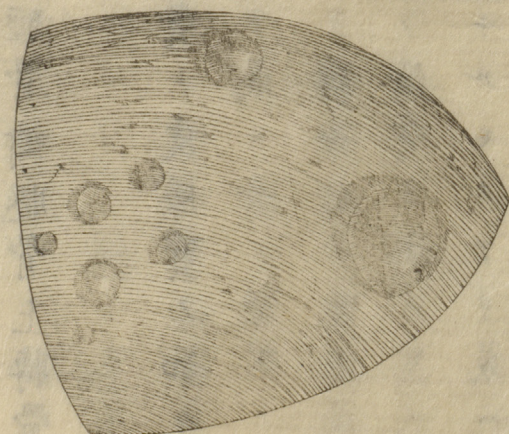
ヘキ腱、筋鞘、筋

シ象牙  
質骨腫

等ノ化骨シテ

贅腫ノ如キモ

ノニアリテハ



同時ニ腱、筋鞘及筋ニ萎縮ヲ見ハスモノナリ此

ノ如キ患者ノ體中各骨ヲ檢スルトキハ其數二

十乃至五十ニ至ル而シテ尖リタル骨ノ隆起ヲ



腱ノ附着部ニ發見スルコアリ加之化骨機ノ甚  
シキモノニアリテハ全肩胛筋及ヒ全膊筋ニ化  
骨ヲ生シ上肢ノ運動ヲ全ク妨クルニ至ルコア  
リ此ノ如キ化骨ハ時トシテ兵卒ノ三角筋ニ見  
ルコアルヲ以テ之ヲ操練性化骨ト名ク此生骨  
機ハ慢性炎機ノ產物ニシテ腦膜及ヒ脊髓膜ニ  
生スル異常ノ生骨機ト其病機ヲ同フスルモノ  
ナリ右ニ述フル操練性化骨ナルモノハ通常三  
角筋ニ化骨機ヲ生スルモノニシテ殊ニ操練ノ  
際小銃ノ三角筋ニ摩軋スル所ニ生ス然レモ多



發スル症ニアラス蓋シ該症ヲ發スル兵卒ハ天賦新骨ヲ生シ易キ機能ヲ稟クルニ因スルモノナラン其他腱殊ニ腱ノ骨ニ附着スル部ニ於テ化骨スル一種ノ疾病アリ然レモ源因ハ之ヲ詳カニシ難シ此ノ如キ症ハ只人ニノミ之ヲ發見スルノミナラス鳥類ニモ亦之ヲ見ルコトアリ骨腫ヲ生シ易キ素因ハ既ニ論セシ如ク軟骨腫ヲ生シ易キ素因ニ類似スルモノナリ即チ軟骨腫ノ如ク若年ニ多シ殊ニ女子ニ比スレハ男子之ニ羅リ易シ然レモ小兒ニアリテハ之ニ羅ル



モノナシトス故ニ彼ノ骨端ニ生スル骨腫ハ總  
テ二十四ノ年齒前ニ發生スルモノトス即チ化  
骨性軟骨腫ノ名稱アル所以ナリ又他ノ骨腫ニ  
アリテハ三十ノ年齒前ニ發生スルモノアリト  
雖稀ナリ總テ化骨機ハ老年ノ者ニ發スルヲ常  
トスレト右ニ論述スル骨腫ノ斯ク若年ノ者ニ  
發生スルハ一種奇異ナリトセサルヲ得サルナ  
リ但シ肋軟骨喉頭軟骨脊柱ノ靱帶ノ化骨及動  
脈ニカルク質ヲ產出スル等ハ通常高老ノ者ニ  
見ル所ノ自然機ニシテ疾病ニアラス該骨腫ハ



高老ノ人ニ發スルハ稀ニシテ若シ之アルモ其  
病機ハ既ニ若年ノ時ニ於テ發生ノ機ヲ始メシ  
モノト做スヘシ骨腫ハ總テ孤生スルヨリ群生  
スルヲ多シトス而シテ其發育慢徐ニシテ且ツ  
老年ニ至ラントスル時期ニハ自ラ消散スルモ  
ノアリ又骨端ニ生スル骨腫ハ體格成熟スル時  
期<sup>二十四</sup><sub>五</sub>歳ニハ漸次縮小曾テ海綿質ナルモノ變  
シテ皮樣質ノ如キ堅牢ノ質トナルモノナリ又  
稀レニハ化骨機ヲ腓或ハ筋ニ波及シ之ニ由テ  
運動ヲ全ク障碍スルニ至ルコトアリ又時トシテ



肺中ニ骨ノ發生ヲ發見スルコトアリ總テ骨腫ノ  
發生ニ由テ生スル局處及全身ノ障礙ハ著シキ  
者ニアラス而シテ通常骨腫ハ發育中疼痛ナク且  
ツ之ニ觸ル、モ亦疼痛ヲ起サス但シ骨腫ヲ關  
節ノ近部ニ生スルハ著シク其作用ヲ障礙ス  
ルコト少ナカラス其他顔骨ニ骨腫ヲ生スルトキ  
ハ著シク醜貌ヲ見ハシ又大趾ニ生スル骨腫ハ  
靴ヲ穿ツヲ妨ケ腱或ハ筋ノ化骨ハ全ク運動ヲ  
障礙ス而シテ外科術ヲ施シ難キコトアリ  
療法骨腫ノ療法ハ都テ發生セル骨ヨリ之ヲ鋸



或ハ鑿ヲ用ヒテ截除スルニアリ但シ關節ノ近  
部ニ骨腫ヲ發生スルトキハ誤ツテ關節腔ヲ開  
クノ恐レアルヲ以テ妄リニ手術ヲ企ツ可カラ  
ス故ニ骨腫ノ為ニ著シク關節ノ作用ヲ障碍シ  
或ハ生命ヲ害スル懼レアリテ危險ノ手術モ厭  
フ可カラサル際ニ於ケル外ハ之ヲ施スモ無益  
ニ屬ス可シ

骨端ニ生スル骨腫上ニハ時トシテ粘液嚢ヲ生  
シ而シテ時トシテ化骨性軟骨其裡面ニ附着シ或ハ  
其中ニ游離スルヲアリ此ノ如キ粘液嚢ハ通常



之ニ近接スル關節腔ト相通スルモノナリリン  
ドフライレ氏ノ検査ニ據レハ此ノ粘液囊ハ關  
節膜ノ非常ニ延展レテ囊狀ヲ成スモノナリト  
云フ

戊 筋腫

ミオ  
ーム

單純ノ横紋筋纖維ヨリ構成セラル、筋腫ナル  
モノ絶ヘテ之ナシ加之諸種ノ贅腫中横紋筋纖  
維ヲ混スル者ハ甚タ稀ナリ但畢竟卵巢乳腺ノ  
肉腫若クハ癌其他其性質ノ複雑ナル贅腫中ニ  
偶然横紋筋纖維ヲ發見スルコトアリ總テ著シク



筋纖維ヨリ構成セラル、贅腫ハ之ニ筋腫ノ名ヲ下スモ固ヨリ不正ナラス故ニ紡績狀細胞ヲシテ筋纖維ニ屬スルモノトナス凡ハ紡績狀細胞ヨリ構成セラル、子宮纖維腫ノ如キモ亦之ニ筋腫ノ名ヲ下スモ可ナリ老年ノ者ニアリテハ攝護腺ニ平滑筋纖維ノ結節狀ヲ成ス者ヲ著シク發見スルコアリ所謂攝護腺肥大ナリ即チ筋腫ニ屬スヘシ其他胃及ヒ食道ノ筋層ニ同一ノ結節物ヲ見ルコアリ右ニ論スル所ヲ以テ之ヲ見レハ單純ノ筋腫ナルモノ絶テナキ者トス



己 神經腫

子ウロ

總テ神經ニ生スル贅腫ヲレテ之ニ神經腫ノ名  
稱ヲ下スハ實際上ヨリ生セル皮相ノ見ニレテ  
誤謬トナスヘシ夫レ真ノ神經腫ト名クヘキモ  
ノハ神經纖維ヨリ構成セラル、者ナリ「イルシ  
ヨウ」氏ハ神經腫ヲ區別シテ二種トナセリ一ニ  
曰ク細胞様或ハ結節様或ハ髓質様神經腫一ニ  
曰ク纖維様神經腫之レナリ甲種ハ神經中樞即  
チ腦脊髓ノ灰白質或ハ白質ニ生ス乙種ハ神經  
實質ニ生スルモノニレテ神經纖維ヨリ成ルモ



ノナリ「ウ」ル「ヨ」ウ氏ハ更ニ乙種ヲ區別シテ有  
 髓神經纖維ヨリ成ルモノト灰白色無髓神經纖  
 維ヨリ成ルモノトナセリ而シテ纖維性神經腫  
 ハ四肢ノ切斷端ニ球形ヲ成シテ生スルヲ多シ  
 故ニ癰痕性神經腫ノ名アリ總テ神經腫ハ脊髓  
 神經ニ發スルヲ最モ多ク腦神經ニ發スルヲ少  
 ナシ

神經腫ハ同時ニ數多ヲ生スルヲ多シ而ノ截出  
 後再發スルアリ其最モ大ナル者ハ雞卵大ニ  
 至ル都テ知覺過敏ナリ該腫ヲ生スル神經ハ其



機能ヲ妨ケラレ且ツ之ヲ妨害スル劇易ニ由テ  
麻痺知覺過敏及痙攣等ノ諸症ヲ續發スルモノ  
ナリ  
療法ハ根治法ヲ以テ主トスベシ即神經腫ト共  
ニ之ヲ生セル神經ノ一片ヲ截除スルニアリ又  
疼痛劇シキ者ニハ鎮痛藥ヲ與フルアリト雖  
固ヨリ姑息ニシテ効ナキ者トス

**漢**

血管腫

オレンギ  
オーム

血管腫トハ即チ主トシテ血管ヨリ構成セラレ  
之ニ些少ノ結組織ヲ交フル贅腫ヲ稱名スルナ



リ又人之ヲ勃張性贅腫ト名ケリ是レ血管腫ノ  
血液ヲ盈ツル多少ニ由テ或ハ緊張シ或ハ弛緩  
シ或ハ増大シ或ハ縮小スルニ因スルナリ次ニ  
血管腫ヲ區別シテ二種トナス

甲

毛細管擴張腫

テレアキエリタレ  
性一名叢錯  
血管腫

毛細管擴張腫ハ毛細管及小動脈ノ擴張且ツ延  
展蟠屈メ叢錯スル者ヨリ構成セラル、者ナリ  
而シテ血管ノ蟠屈ト擴張ト其度ヲ異ニスルニ  
從テ其形狀ヲ異ニス甲症甚シキトキハ其形チ  
隆起ヲナシ之レニ反シテ乙症著シキトキハ單



ニ班ニ俗  
 痣或ヲ  
 母斑ヲ  
 顯ハス  
 モノナ  
 リ總テ  
 皮膚ニ  
 發生ス  
 ルヲ常  
 トス而  
 メ其色

第八十一圖 毛細管擴張腫

イ毛細管ノ汗腺ニ蟠曲絡繹スルヲ示ス汗腺ヲ示

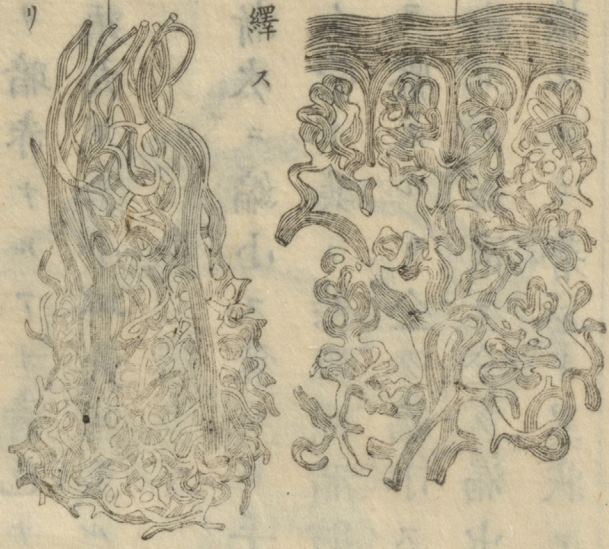
サ、ルハ複雑スルヲ厭フカ

故ナリ口口内粘膜ノ

乳嘴体ニ毛細管ノ蟠屈ノ絡繹スルヲ示ス

右二圖ハ其大サ

真物ニ比スレハ六十倍ナリ





ニ諸種アリ赤色ナルアリ暗赤ナルアリ青色ナルアリ又ク其大サ帽針頭大ヨリ小皿大ニ至ルモノアリ一樣ナラス

手ヲ以テ之ヲ壓スレハ漸次ニ縮小ス然レモ手ヲ放テハ復ヒ勃張ス又血管ト共ニ結組織脂肪織ヲ新生スルトキハ之ヲ壓スルモ全ク縮小スルモノニアラス若シ割出シテ血液ヲ全ク漏出セシ後チ肉眼ニテ之ヲ檢スルニ著シキ異狀アルヲ見ス固ヨリ毛細管ノ變常ナルヲ以テ目撃スルヲ克ハサルナリ即チ次ニ論スル海綿質様



血管腫ニ異ナル一症ナリ  
 乙 海綿質様血管腫 カウエル、アセギ、オ、イ、ノ  
一名海綿質様静脈腫

第八十二圖

唇ニ生セシ海綿質様血管腫

細狀ヲ成シタル大

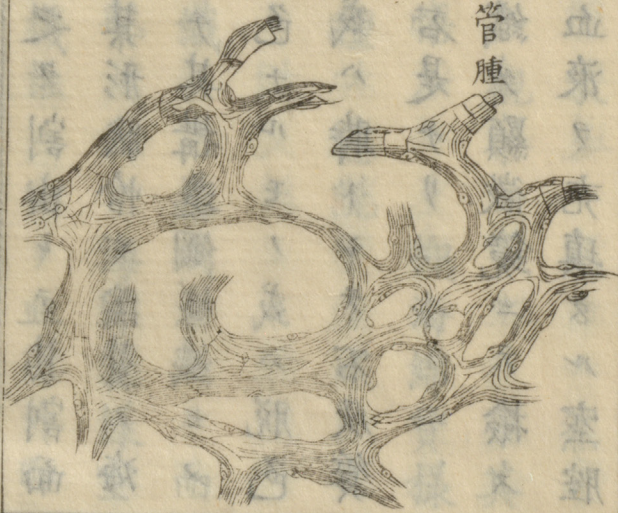
ナル空腔ニハ血液

ノ充滿スル者ト想

像スヘシ真物ニ比

スレハ凡ソ三百五

十倍ナリ





海綿質様血管腫ノ構造ハ之ヲ割出シテ其割面  
ヲ肉眼ニテ檢スルトキハ其形狀恰モ陰莖ノ海  
綿質ト一樣ナル者ナリ即チ其構造網様織ニメ  
其網眼ノ各所ニ凝血ノ赤色ナルモノ或ハ脱色  
セル者アリテ之ヲ填充ス或ハ時トシテ石灰質  
ヲ充ツル者アリ所謂靜脈石是ナリ

海綿質様血管腫ノ網様組織ヲ顯微鏡ニテ檢ス  
ルニ網狀ニ區劃ヲ成シテ血液ヲ充填スル空腔  
ノ壁ヲ成ス裡面ニハ多クハ紡績狀細胞ヲ排列  
ス是蓋シ靜脈エンドテル細胞ニメ即チ靜脈ノ



擴張セシモノ相會シテ此ノ如キ組織ヲ構成ス  
ルモノナラン右ニ論スル海綿様組織ノ性狀ヲ  
論説スルニ諸般ノ説アリテ未タ一定セス然レ  
ニ陰莖海綿質ノ構造ニ就テ觀察ヲ下サハ亦其  
組織ニ大ナル差異ナキヲ悟ルヘシ抑海綿質様  
血管腫ノ發生ヲ説クニ三種ノ臆説アリ次ニ之  
ヲ論述スヘシ

一 海綿質様ノ空腔ハ結組織ヨリ構成セラル而  
レテ后此組織血管ト相連繫ス而シテ海綿質様空  
腔内ノ血液ハ結組織胞ノ機能ニ由テ血行外即



チ血管外ニ血液ヲ更ニ新生スルモノナリトス  
然レモ血管外ニ血液ヲ更ニ新生スル臆説ニ至  
リテハ大ニ疑團ヲ免レス

二擴張セシ小ナル静脈互ニ相交錯シテ脈壁相  
抵觸スル所漸次菲薄トナリ加之脈壁全ク消失  
スルトキハ互ニ吻口シテ血液ヲ交通ス即チ其  
質海綿狀トナルモノナリ此ノ如ク静脈ノ漸次  
擴張シテ互ニ接スル所ノ脈壁遂ニ消亡スル性  
狀ハ殊ニ之ヲ真皮若クハ骨ニ生スル海綿質様  
血管腫ニ於テ著シク目撃スルヲ得ルモノナ



リトス  
三<sup>リ</sup> Lindqvist 氏ノ説ニ據レハ總テ血管ハ  
擴張殊ニ海綿質様血管腫ニアリテハ每常血管  
外ノ組織ニ最初細胞滲淫ヲ生シ然ル后其組織  
ニ瘢痕性收縮ヲ生ス然ルトキハ之ニ由テ脈壁  
ハ四方ニ牽引セラル、ヲ以テ其内徑擴張スル  
ナリト云

其他尚毛細管擴張腫ヨリ區別スヘキ者アリ即チ  
時トメ囊狀ヲナシテ皮下ノ大ナル静脈ト連繫  
スルヲアリ或ハ海綿質ヨリ構造スル「カプセル」



中ニ小動脈及小靜脈ヲ充ツルコアリ或ハ纖維  
腫或ハ脂肪腫中ニ偶生スルコアリ又海綿様血  
管腫ハ多クハ皮下蜂窩織中ニ生スル者ナリ皮  
膚、筋骨ニ生スルハ甚タ稀ナリ之ニ反シテ肝臟  
殊ニ其表面或ハ時トシテ脾臟腎臟中ニ生スル  
コアリ此腫ニ疼痛アル者アリ或ハ之レナキ者  
アリ但シ疼痛ナキヲ多シトス  
鑑定 海綿質様血管腫ハ時トシテ鑑定シ易カ  
ラサルコアリ殊ニ皮膚ニ發スル時ニ於テ然リ  
トス毛細管擴張ニ比スレハ壓迫ニ由テ縮小シ



易シト雖モ深在ノ毛細管擴張腫ト誤リ易シ又  
深處ニ生スルハ鑑定大ニ難シ每常皮下ニ波  
動ヲ顯ハシ之ヲ壓迫スレハ縮小シ又夕氣ヲ吞  
テ努力セシムレハ從テ勃張ス然レモ壓迫ニ由  
テ縮張スルト氣ヲ吞テ努力スルニ由テ勃張ス  
ルハ每常著シク發スル症ニアラス故ニ時トメ  
脂肪腫、囊腫其他柔軟ノ腫物ト誤リ易シ或ハ全  
ク鑑定シ得サルコアリ

余近頃順天堂ニ於テ一患者男ヲ診ス齡三十  
餘體格強壯ナリ左ノ下顎隅ノ稍ヤ後部ニ當



リ一腫物ヲ生スル年アリ其形及大サ小孟ヲ  
 伏スルカ如ク腫張ス之ヲ按スルニ柔軟ニシ  
 テ彈カアリ而シテ波動アルカ如キヲ覺フ之  
 ヲ動移スルモ動カス且ツ分堺判正ナラス指  
 頭ヲ貼シテ壓スルモ搏動ヲ覺ハス氣ヲ吞テ  
 努力セシムルモ腫張セス之ヲ壓迫スレハ微  
 ニ縮小スルヲ知ル而シテ皮膚變色セス且ツ  
 初メヨリ疼痛ナシ余カ鑑定固ヨリ膿腫ニア  
 ラサルヲ信スト雖モ果シテ海綿質様血管腫  
 ナルカ將タ囊腫若タハ脂肪腫ナルカ或ハ他



ノ流動物所蓄ノ腫ナルカ疑團ヲ免カレス故  
ニ探膿針ヲ以テ試ニ之ヲ刺穿スルニ管ヨリ  
暗赤ノ血液少許ヲ流出スルノミ是ニ由テ聊  
カ疑團ヲ解クト雖モ未タ鑑定確實ナラス依  
テ手術ヲ施コセリ先ツ皮膚ヲ切開シテ之ヲ  
檢スルニ皮下ニ結組織ヨリ成レル膜様物アリ  
テ腫物ヲ包裹スルヲ見ル刀ヲ以テ之ヲ開  
割スルニ暗赤ノ血液ヲ湧出セシム其切面ヲ  
檢スルニ其構造網様織ニシテ即チ海面質ナ  
リ始メテ海綿質様血管腫ナルヲ知レリ以テ



鑑定ノ時トシテ困難ナルヲ知ルヘシ乃チ剪  
刀ヲ以テ其大半ヲ截出シ其深處ニアル者ヲ  
僅ニ殘セリ如何トナレハ頸靜脈ト連繫スル  
ヲ恐レテナリ術后乾綿撒糸ニ一半格魯兒鐵  
丁幾ヲ蘸シ創面ニ貼シ繃帶ヲ施コセリ爾來  
日ヲ經ルニ從テ瘡面漸次化膿シ從テ肉芽ヲ  
生シ遂ニ小癬痕ヲ遺シテ治セリ

海綿質様血管腫ハ先天ノ者ハ稀ナリ而シテ小兒  
ニ多シ之ニ反シテ「デレアンギイ」ク體中之ヲ生  
スル部局ハ既ニ論スルカ如ク皮下蜂窩織ヲ最



モ多レトス而レテ漸々増大スルノ性ヲ具フル  
モノナリ殊ニ頭蓋ニアリテハ時トレテ其骨ヲ  
浸淫荒蕪スルヲアルカ故ニ危険トナスヘシ

附録

イ海綿狀淋巴贅腫カリンパンギオマ、カタルノースム

贅腫中最モ稀レニ見ル所ノ症ニレテ其構成  
ハ海綿狀血管腫ニ類似ス只血液ヲ盈テスレ  
テ淋巴ヲ盈ツルヲ以テ異ナリトスルノミマ  
クログロシア病厚舌ノ形狀ヲ以テ先天ニ舌ニ  
生スルヲアリ又頸ニ生スルヲアリ即チチーステシ囊腫



性<sup>ヒツロ</sup>湧<sup>ム</sup>乙<sup>ム</sup>腫<sup>ム</sup>ト名ク共ニ小兒ニ生スルヲ多シ其  
他唇頰頤等其他ノ皮下蜂窩織ニ生スルヲア  
リ殊ニ若年ノモノニ生シ易シ又大腿ニ生ス  
ル水脈ノ擴張<sup>フクヤス</sup>ハ海綿狀淋巴贅腫ニ變スルヲ  
アリ

**口母班**

子<sup>コ</sup>1ウス、ワ  
ス<sup>ス</sup>ク<sup>ク</sup>ロ<sup>ロ</sup>1<sup>1</sup>ス<sup>ス</sup>

該症ハ皮肉ノ表面ニ存在

スル血管ニ生スル叢錯性血管腫ニ外ナラス  
多ク先天ナリ但シ初生ノ時ヨリ増長セス即  
チ其大サヲ變スルヲ必シ其他ノ血管腫ト區  
別アルモノニアラス而メ母班ニ皮膚ノ肥大



色素產生血管擴張毛髮發生等諸般ノ症狀ヲ

合併スルモノナリ

母斑ヲ顔ニ生シテ著シク蔓延セサルモノニ

アリテハ其部ノ皮膚ヲ全ク割除シ成形手術

ニ由テ他ノ皮膚ヲ以テ其缺乏部ヲ填充スル

アリ又時トシテ腐蝕藥殊ニ發烟ヲ用フル

アリ

**辛**肉腫

サルコ

諸般ノ贅腫中其解剖的構成ニ就テ之ヲ一定シ  
且ツ談腫ヲレテ之ヲ他ノ贅腫ト種別スルニ數



多ノ歲月ヲ費シ且其性質ノ竅明ナルヲ得ル  
ノ難キハ該腫ヨリ甚シキモノナレ抑モ古名ナ  
ル肉腫ノ名ハ原ト肉ト云字義ニ資ルモノニメ  
即チ古人該腫ヲ切斷シテ之ヲ檢スルニ其斷面  
ノ肉ニ類スルヲ外見スルニ由テ来レル者ナリ  
固ヨリ此ノ如キ皮相ノ見ニ由テ肉腫ヲ鑑定ス  
ルヲ能ハス如何トナレハ其名稱ノ茫漠トメ且  
ツ必ス之ニ類スルモノニアラサレハナリ「シュ」  
氏ハ總テ筋纖維ヨリ構成セラル、贅腫即チ筋  
腫ノ如キモ亦之ニ「サルコーム」ノ名ヲ冒ラセシ



ヲタ企望シタリ然レモ之ヲ賛成スルモノ多カ  
ラサリキ是ヲ以テ人或ハ解剖上ヨリシテ肉腫  
ノ理解ヲ稍一定セリ即チ贅腫ノ細胞ニ富ミ且  
ツ其構成蜂窩狀ミルウエオラールヲ成サス而メ癌腫ト其性質ヲ  
同フセサル者ヲシテ肉腫ノ本性トナセリ輒近  
殊ニ凡ソ十年以來更ニ精密ノ検査ニ由テ其構  
成ヲ稍詳カニセシヨリ始メテ該腫ノ真相ヲ一  
定スルニ至レリ夫輒近一定ノ論ニ據レハ肉腫  
ト名クヘキモノハ結締質即結組織軟  
骨硬骨等筋及神經  
等ノ組織ヲ發生スヘキ一系ノ區域内ニ屬スル



組織ヨリ發生スル者ニシテ且ツ成熟セル一定ノ組織ヲ構成スルヲナク或ハ之ヲ構成スルモ只其一小部ニ止マルノミ而メ一種ノ變質ヲ見ハスモノトス「リンドフライシ」氏ハ炎症新生物ヲシテ其諸般ノ時期ニ於テ肉腫ヲ發生スヘキ基礎トナセリ又脈管ノ細胞性原質ハ時トシテ肉腫ヲ發生スル母基トナルノ説ハ疑ヲ容レス殊ニ輓近「ギョー」ステル「チルマン」アルント等諸氏ノ實査ニ由テ益證明セラレヨラ得タリ然レモ肉腫ハ總テ此ノ如キ原因ヨリ發生スルモ



ノナリト做スニ至リテハ疑團ナキ能ハサルカ  
如シ又<sup>コシタラクチ</sup>「ツケ」グラウツツ氏ハ肉腫中ニ時トメ  
收縮性細胞ヲ發見セリ然レ<sup>モ</sup>他ノ學者ノ實驗  
ニ據レハ之ヲ證明スルニ至ラス  
此ノ如キ解剖上精察ノ検査ニ基ツキ肉腫ノ名  
義ヲ詳カニセシヨリ以來肉腫ナルモノハ肉眼  
ニ由テ鑑定スヘク又病床ニ臨テ肉腫ニ見ハル  
一種ノ經過ニ由テ之ヲ認定スルヲ得ルニ至  
レリ夫レ肉腫ノ鑑定ハ生活體ニ於テハ次ニ區  
別スル所ノ組織學上ノ性質ニ從テ之ヲ詳カニ



セニヨリ其鑑定豫後經過等ハ其發生スル部局  
及ヒ其發育ノ急慢等ニ關係スルヲ多シ故ニ之  
ヲ詳カニスルヲ大ニ緊要ナルヲ以テ談件ニ就  
テハ之ヲ終ニ詳説シ先ツ最初ニ肉腫ノ組織學  
上精細ノ檢査ヲ以テ之ヲ種別スル左ノ如シ

イ

肉牙性肉腫

グラマラネオニスサルコーム  
一名ウイルシヨウ  
氏ノ圓胞性肉腫

該腫ノ組織ハ肉

芽ノ上層ト全ク同シク或ハ之ニ類似スル者ヨ  
リ成ル而シテ常ニ數多ノ淋巴小體ノ如キ小圓  
胞ヲ含有ス然レ氏時トシテ胞間質ハ極小量ニ  
シテ容易ニ發見スヘカラサルヲアリ或ハ時ト



シテ多量ナルヲ第八十三圖

アリ而メ胞間質

ハ「子ウログリア」

腦脊髓ノ結節様

細胞間或ハ腦神

經纖維ノ中間ニ

存シテ互ニ之ヲ

連結スル結組織

ニ類スル物質ナ

リノ如ク無色透

明ナルヲアリ或ハ

腫狀ナルヲアリ

スモノアリ

肉芽性肉

肉腫ノ組

織ウズル旨

性圓形腫細胞

眞物ニ比

スレハ其

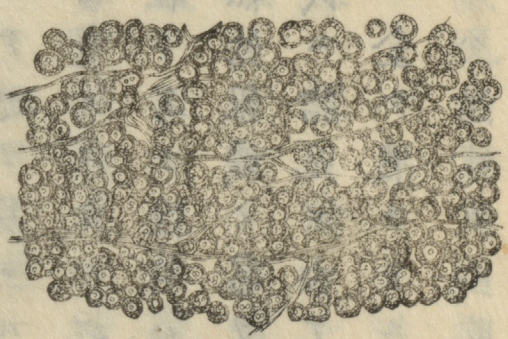
大テ四百倍

ニ見ナルヲアリ

或ハ網狀ヲナ

成スヲアリ或ハ

浮





口紡績狀細胞肉腫

細クシテ延長セル細胞ナ

リ所謂纖維細胞ニシテ通常結束セル如ク排列  
シテ詭腫ノ組織ヲ成形ス而ノ多クハ胞間質ヲ  
具ヘサルモノアリ或ハ時トシテ之ヲ具フルモ  
ノアリ若シ纖維狀物ヲ多ク含有スルモハ之ヲ  
纖維性肉腫若クハ之ヲ纖維腫ト名ク往時ハ紡  
績狀細胞組織ヲシテ之ニ未熟結組織ノ名ヲ命  
セシナリ然レ氏ビルロト氏ハ胎児ニ由テ精  
シク之ヲ組織學上ニ檢セシニ全ク然ラサルモ  
ノナルヲ證セリ如何トナレハ紡績狀細胞組



織ハ多ク紡績狀細胞肉腫ニ發見スルモノニメ  
胎兒ノ結組織中ニ見サルモノトスレハナリ夫  
レ紡績狀細胞組織ヲ生理學上ニ就テ論スルハ  
ハ未熟ノ筋組織或ハ神經組織ナリ即チ紡績狀  
細胞組織ノ發育セシ者ナリ是ヲ以テ之ヲ觀レ  
ハ紡績狀細胞肉腫ハ之ヲ未熟ノ筋腫或ハ神經  
腫ナリト云フモ不可ナラサルニ似タリ然レモ  
實際上ヨリ之ヲ論スレハ鑑定ノ際大ニ確實ナ  
ラサルモノアリ例之一神經ニ紡績狀細胞ヨリ  
成レル贅腫ヲ生スルトキハ之ヲ神經腫ト看做



第八十四圖

ウィルショウ氏ノグリオ  
サルコーム

圓形細胞肉腫ニ屬ス

該腫ノ胞間質無色透

明ニメ腦脊髄ノ子ウ

ログリアルト

同質ナル

ヲ以テ

名ヲ命

ス



シ又筋ニ紡績狀細

胞ヨリナレル贅腫

ヲ生スルトキハ之

ヲ筋腫ト看做ス如

キハ其當ヲ得タル

者ナルヘシト雖モ

若シ真皮若クハ陰

莖ニ該腫ヲ生スル

トキハ之ニ神經腫

筋腫若クハ纖維腫



第八十五圖

紡績狀細胞ノ組織



ノ正徴ヲ得サルトキハ則チ紡績狀細胞肉腫ノ  
 名ヲ命セサルヲ得サルヘシ總テ該腫ノ豫後及  
 ヒ經過等ヲ詳カニスルニハ之ヲ直發スル本源

ノ名ヲ命スヘキカ  
 大ニ疑團ナキヲ得  
 ス如何トナレハ神  
 經筋及ヒ結組織ハ  
 即チ真皮及ヒ陰莖  
 ニ存在スレハナリ  
 故ニ之ヲ鑑識スル



ニ索ムルヨリ該腫ヲ生スル局部或ハ發育ノ急  
慢又其硬軟等諸般ノ病床検査ニ由テ之ヲ知ル  
ヲ緊要トナスヘシ

ハ最大胞肉腫

「ワルシヨウ」氏ハ該腫ヲシテ最

モ大ナル胞ヲ含有スル一種ノ肉腫トナセリ而  
メ其形成ハ圓ク或ハ不正或ハ數多ノ延長スル  
尾形ヲ具フルモノアリ此ノ如キ大ナル胞ハ亦  
之ヲ胎児ノ脊髓ニ發見ス但シ該腫ニ含有スル  
モノ、如ク大ナラス此最大胞ハ不正形ナルプ  
口トプラスマノ集積物ニ外ナラス而シテ三十日



第八十六圖

下顎骨肉腫ノ最

大胞

真物ニ比スハレ其大サ

四百倍



第八十七圖

下顎骨ニ

生セシ

最大胞

肉腫ニ

シテ囊

腫及化

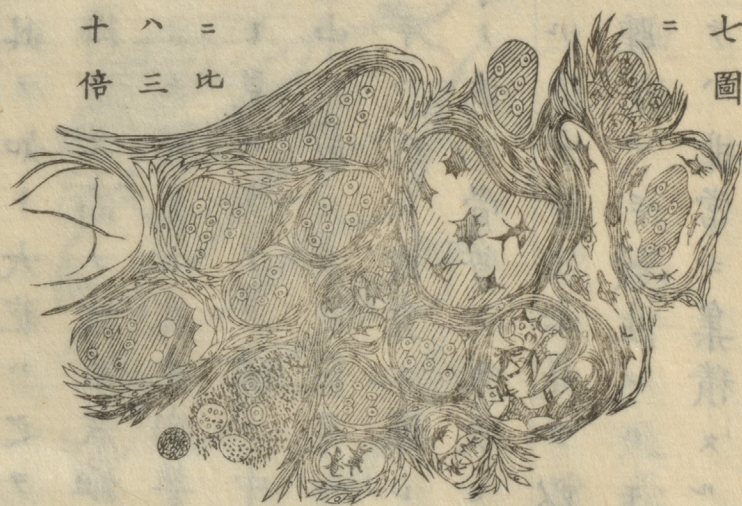
骨部ヲ

見ハス

真物ニ比

スレハ三

百五十倍





リ三十以上ノ校ヲ含蓄ス此ノ如キ大胞ハ之ヲ  
人身體ニノミ發見スルヲ得タリ而メ紡績狀細  
胞肉腫或ハ纖維性肉腫中ニモ發見ス其他肉芽  
性肉腫及ヒ粘液性肉腫ニモ見ルヲアリ殊ニ中  
心骨肉腫及骨膜下骨肉腫中ニ最モ多ク發見セ  
ラルキ<sup>「リリーケル」</sup>及<sup>「ウーゲ子ル」</sup>氏ノ檢査ニ據レ  
ハ此ノ如キ最大胞ハ肉芽ノ為ニ骨質ノ吸收セ  
ラル、時ニ當リテ發見スル<sup>「多シト」</sup>云是ヲ以  
テ之ヲ見レハ最大胞ハ肉腫ニノミ發生スルモ  
ノニアラス只肉腫ニアリテハ非常ニ集積スル



ヲ異ナリトスルノミ

二網狀細胞肉腫ヒツセルレンサハコーム一名粘液性肉腫

細胞ノ先端著ク延長

スルトキハ必ス多量ニシテ且ツ柔軟ニシテ透

明ナル胞間質第八十八圖

ヲ存在スル者頭皮層ニ

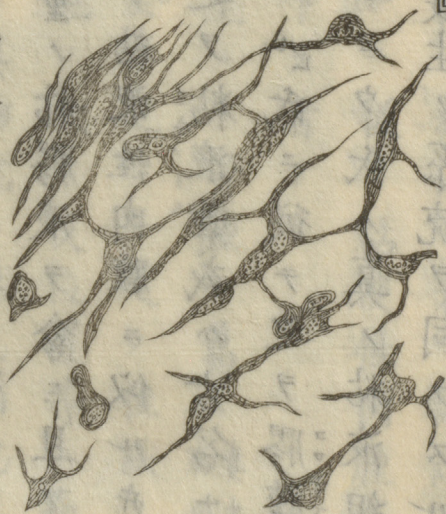
ナリ故ニ粘膠生セシ粘

質ナル胞間質ノ粘液組

ヲ具フル肉腫織ヲ示ス

ハ星狀ノ細胞真物ニ

ヲ其中ニ含有比スレハ其大サ四百倍





スルヲ以テ最モ美觀ヲ見ハスモノナリ右ニ論  
說セル諸種ノ贅腫中多量ノ粘膠液ヲ含ミ且ツ  
其質此ニ論スル贅腫即チ粘液性肉腫ニ似ルル  
ハ「<sup>ワイル</sup>シヨウ」氏ニ從テ之ヲ粘<sup>ニキ</sup>液<sup>ノ</sup>腫<sup>ム</sup>或ハ古名ナ  
レトモ「<sup>ヨハン</sup>子ス、<sup>ミル</sup>ル」氏ニ從テ之ヲ膠腫<sup>コロサマ</sup>  
ト名クルモ可ナリ「<sup>ワイル</sup>シヨウ」氏ノ真ノ粘液組  
織ナル者ハ結組織ト其發生ノ系統ヲ同フスル  
モノナリ又時トシテ粘液性肉芽中ニ發見スル  
「<sup>ワイル</sup>シヨウ」氏ノ粘<sup>ニキ</sup>液<sup>ノ</sup>腫<sup>ム</sup>中ニハ紡績狀  
細胞及圓形細胞或ハ發育セシ軟骨ヲ發見スル



アリ然ルトキハ粘液組織ナル者ハ未熟或ハ  
柔軟ナル軟骨組織ト看做ヲ得ヘシ殊ニ粘液腫  
中ニ軟骨腫ニ於ケルカ如キ蜂窩狀ノ區劃ヲ見  
ハスハニ於テハ軟骨組織ニ類似ス右ニ論説セ  
ルカ如キ性狀ノ小差アルニ從テ粘液性肉腫或  
ハ粘液性軟骨腫ノ名ヲ下ス者アリ

**ホ** アルケオレスサルコーム  
蜂窩狀肉腫

稀ニ發生スル贅腫ニ屬ス

真皮  
筋及

骨ニ生  
シ易シ而シテ解剖上ニ於テ之ニ一定ノ性狀ヲ

與フルヲ大ニ難シ其細胞ノ大サ及位置等ハ癌  
腫ノ細胞ト誤リ易シ而シテ其細胞ハ淋巴細胞ニ



此スレハ著シク大ナリ即チ其大サ軟骨細胞或ハ大ナル扁平内皮胞ニ粗同シ而メ通常一胞中ニ光澤アル核ヲ一箇ヨリ數箇ヲ含有ス細胞ハ纖維狀若クハ無色透明ナル胞間質中ニ散在ス即チ胞間質蜂窩狀ヲナシテ其中ニ一箇或ハ數箇ヲ含有スルモノナリ而シテ細胞ハ隣接スル纖維性胞間質ト常ニ密着シテ脱離シ難シ此性質ハ組織學上ニ就テ肉腫ヲ鑑定スルニ最モ着目スヘキ要事ニ屬ス如何トナレハ此ニ論セシ大ナル結組織細胞ハ真ノ癌組織ニ於テ見ルカ如





第八十九圖

三角筋ニ生

セシ蜂窩狀

肉腫

真物ニ比スレ

ハ其大サ四百倍



第九十圖

脛骨ニ生セシ蜂

窩狀肉腫

真物ニ比スレハ

其大サ四百倍



キ内皮細胞ニアラサンハナリ時トシテ此ノ如  
キ細胞ハ胞間質ヲ具フルヲナク互ニ相密集ス  
ルヲアルヲ以テ内皮癌ト誤マリ易シ

ヘ色素肉腫

ヒフメントサルコム  
イム

總テ各種ノ肉腫中ニ色素ヲ

發生スル者ヲ以テ此名ヲ命スルナリ故ニ一種  
特異ノ性狀ヲ具フル肉腫ニアラス而メ通常其  
色素顆粒狀ヲ成シ或ハ一樣ニ蔓佈シテ顆粒狀  
ヲ成サ、ルモノアリ而メ其色或ハ褐色或ハ黒  
色ナリ通常色素ハ細胞中ニ含有ス胞間質中ニ  
含有スルハ稀ナリ其色素ハ全腫ヲ悉ク染ムル



モノアリ或ハ其一部ヲ染ムルモノアリ而シテ  
其色ニ濃淡ノ差アリ總テ色素肉腫ハ真皮ニ生  
スルヲ多シトス殊ニ足或ハ手ニ多シ頭頸及軀  
幹之ニ亞クモノナリ右ニ論スル各異ノ肉腫中  
紡績狀細胞肉腫ニ色素ヲ發出スルヲ多キニ居  
ルヘシ

集合スル細胞ノ位置ハ一ハ肉腫組織ノ纖維ノ  
方向ニ關シ一ハ網狀ニ密佈スル血管ノ形狀ニ  
關スルモノナリ故ニ細胞ノ集合スル位置ノ異  
ナルニ從ツテ胞間質即チ肉腫ノ纖維ノ方向ニ



差異ヲ生スルト云モ其關係同シ

ト絨毛狀肉腫 諛腫ハ多ク各部ノ沕乙膜ニ發

生シ易シ總テ沕乙膜ハ諸般ノ病性作用ニ由テ

第九十一圖

腦ノ薄膜ニ

生セシ絨毛

狀肉腫

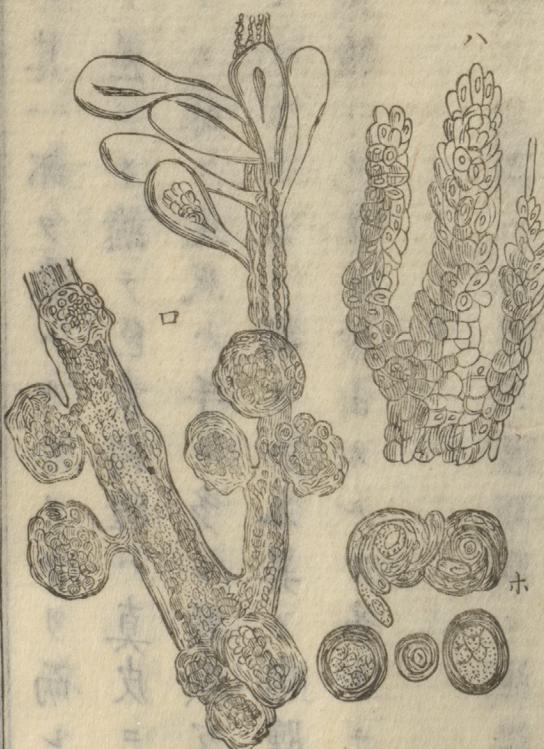
イ毛細管

ノ壁ニ細

胞ノ滲漏

スルヲ示

ス





口 脈壁ヨ

リ 發生セ

シ 結節物

ハ 毛細管

重層ノ「エ」ンドテルヲ以テ被覆セラル

二十全發育セシ「エ」ンドテル細胞ニシテ内

皮胞ト區別シ難シ

ホ 細胞集積シテ結節ヲ成ス

其部ニ絨毛狀病性產物ヲ發生ス而メ此產物ハ

主トシテ結組織及ヒ血管ニ由テ成ルモノナリ

其部ニ發見スル細胞ハ内皮胞ノ其數ヲ增多シ

且ツ増大セシモノナリ即チ異形關節炎ニ由テ





生スル關節膜ノ絨毛體及心臟外膜及内膜

殊ニ  
瓣膜

軟腦膜ノ「パクヒオ」氏腺及脈絡叢ニ新生スル絨

毛體モ亦此產物ニ外ナラス次ニ軟腦膜ニ生ス

ル該腫ノ形狀ヲ示スヘシ

最初軟腦膜血管ノ外膜<sup>アトエンチア</sup>ニ限局性細胞滲滯ヲ生

ス<sup>イ</sup>圖<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>ヘシ而<sup>レ</sup>此產物漸次結節狀或ハ菌狀ニ

發育シ然ル後或ハ硝子樣或ハ纖維狀結組織ニ

變シ或ハ其中ニ空腔ヲ形成シ遂ニ血管ノ内徑

ト相交通スルニ至ルモノナリ<sup>ロ</sup>圖<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>ヘシ而<sup>レ</sup>シテ

細胞ノ一部ハ内皮胞樣物ニ化シ漸々結節狀



ノ新生物ヲ被フモノナリ又此ノ如キ集積スル  
 無數ノ細胞互ニ壓迫ヲ受ケテ扁平トナルヲア

第九十二圖

腦膜ニ生セ

乾燥シ或ハ石  
 灰ニ化スルヲ

アリ

千真珠様贅腫

腦膜ヨリ發

生セシ「ウイルシ

ヨウ」氏ノ真珠



腫 珠 様 真

真物ニ比ス  
 レハ二百倍



腫ハ真珠ノ如ク光澤アリテ其大サ黍大ヨリ豌  
豆大ニシテ血管ナキモノナリ是レ全クエンド  
テル胞心臓血管水脈関節囊靱帶及筋膜等ヨ  
ノ裏面ニ排列スル扁平細胞ヲ云ナリ  
リ成レルモノカ或ハ真ノ内皮胞ニ属スル者カ  
未タ詳カナラスウイルシヨウ氏ハ曾テ此ノ如キ  
真珠腫ヲ結組織胞ヨリ成レルモノトナセリ即  
チ該腫ヲシテサルコームニ属セシムルモ不當  
ナラサリシナリ

リグレキスホルンサルコーム叢錯狀肉腫一名癌様サルコーム或ハ腺様サルコーム  
ハ肉腫ハ殊ニ眼窩或ハ腦ニ生シ易シ或ハ時ト



ノ耳核ニ生スルアリ圖ニ示スカ如ク該腫ノ  
細胞ヨリ成レル圓柱狀物或ハ結節樣物或ハ球  
狀物ハ漸次結組織間ニ竄入シ而シテ其纖維ヲ  
離開シテ其中間ヲ填充スルモノナリ此細胞ハ  
脈管外ニ游出セル白血球ナルカ將タ結組織胞  
ナルカ將タ肉皮胞ナルカ未タ詳カナラスト雖  
モ蓋シ右ノ各種細胞共ニ之ヲ形成スルモノナ  
ルヘシ  
該腫ヲ形成スル細胞ハ最初微小ニシテ或ハ圓  
ク或ハ不正ニシテ稜角アリ而シテ次ニ述フル



カ如キ變質ヲ

將來スルモノ

ナリ即チ血管

細胞間ニ竄入

シ而ノ血管ノ

周圍ニ密接ス

ル細胞ハ硝子

様或ハ纖維狀

結組織ト化シ

其最モ外圍ニ

第九十三圖

乙

叢錯性肉

腫様肉名腫癌

樣或肉ハ腫腺

甲乙共ニ

腦ニ發生

セシモノ

ヲ示ス

真物ニ比

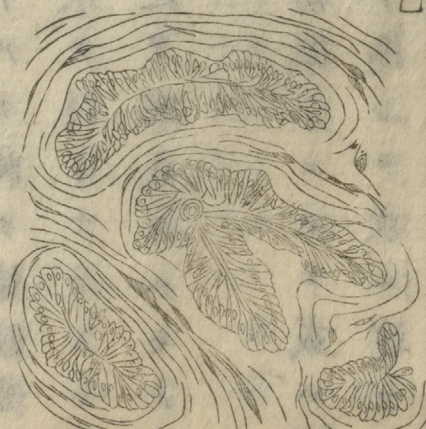
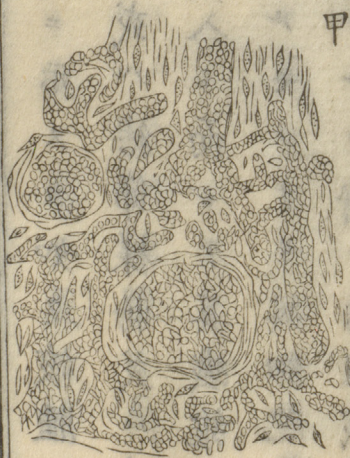
スレハ三

百倍ヨリ

四百倍ナ

リ

甲





在ルモノハ即チ血管ノ外衣ヲ形成シ或ハ結組  
織性ノ線狀ヲ形成スルモノナリ是ヲ以テ此ノ  
如キ產生物ハ組織中ニ竄入シテ絨毛様物トナ  
ル<sup>リ</sup>ンドフライシ<sup>ハ</sup>之ヲ中間的乳嘴性<sup>ミ</sup>キ  
ソー<sup>ム</sup>腫<sup>液</sup>ト名ク

外科通論卷之二十一 終



卷三

川  
天  
堂  
解  
片

#1305202299  
v. 21



東京第四大區四小區  
湯島五丁目十三番地

出版人

佐藤尚中

右同所

述人

佐藤進

發兌書林

馬喰町二丁目五番地

島村利助



